

会派視察（新政同志会）

【函館市地域交流まちづくりセンター】・・・所感

大竹 政雄

この施設の活用について、沿革の説明経過の中で、大正当時の建物を改修し現在に至っている、見学をする中で、エレベーター（現存する最古）をはじめ、大理石等を使った内装もレトロ感があり、こういった使い方もある ことに感心させられたところでした。

委託事業者ならでのアイデアで、市民が活用する市民の為の施設を強く感じる。出展者も多く抽選にて決定しているとのこと。また朝市みたいなお店もあり、時間も勝手にきめるなど結構自由に使用できるのも魅力を感じる。

また各自が珍しいものを展示（明治維新時代の風景等）して、市民や観光客に見てもらえるスペースもあり、全ての場所が上手く活用されている。

また2階、3階の各部屋の活用なども独自のアイデアで、空室にならない工夫もしていた。使用に際して細かい指示等行政からあるようだが、上手くクリアしていることも、委託事業者の素晴らしさを感じたところである。

本市も来年5月に新庁舎に移る訳だが、市民の活用スペースに於いて、こういった管理運営は、これからの課題のように感じたところである。

尚、行政から委託を受けている移住者サポートや定住サポートなどは、あまり効果を期待できるような政策とは思えないと、本音を聞かされ共感したところであった。

千歳市 【防災学習交流センター・そなえーる】・・・所感

施設に行く途中、厚真町の震災状況を視察、道路の土砂はほとんど除去も終わり一部通行止めはあったが、被害（建物倒壊、山崩れ）を見る事が出来た。悲惨な姿に、厚真町役場を訪ね、会派皆で少しですが気持ちを込めた義援金を届け、視察先に向かったところである。

センターでは、初めに事業費や工程の説明を受ける中で、この地域に自衛隊の演習場等があり、建設にあたっては防衛省からの補助金が75%あるという

ことで、はうらやましさを感じたところであった。

そして、災害に対する防災意識を高めるために、今迄に起きた様々な災害の映像（厚真町地震も入っていた）の中で、災害時の行動を促すもの、特に小、中学生が学習するのでわかりやすいものであった。

体験コーナーでは、地震の強度を体験するものや、煙での避難の方法、高層の建物からの避難具で脱出体験もでき、災害時に慌てることなく使用が出来、訓練としても有効だと感じた

この施設は防災訓練もしているもので、敷地も広く、空いているときは、サッカーなど、スポーツ施設として貸し出しているとのことであり、本市の現状の予算を考えるとなかなか難しいと思うが、市民の防災意識を高めるために、新庁舎に映像施設等の提案をしたいと思う。

北広島市 【バイオマス利活用施設】・・・所感

最終処分場、し尿処理場の老朽化に伴い、下水汚泥と生ごみの一体処理による消化ガスを作ることによって、汚泥乾燥で必要な重油が大きく削減するシステムを視察してきたところである。

日本ではまだ最新の設備であり、これから施設の老朽化が進めば、建設コストや維持管理コストを考慮すればこのような施設に移行するであろうと感じた。

しかし、生ごみの遺物混入については、機械の故障や破損につながる為、分別時の市民の意識、協力体制が課題とのことでしたが、ゴミの分別問題と同じで、市民の協力は時間をかけ、一つ一つクリアすることにより問題解決するだろうと感じたところである。

また、乾燥汚泥の肥料は、市民や農家に還元、まさに循環型としての役割もあり、将来、本市も農集排処理施設や2カ村清掃組合処理場の統合し、生ごみと一体化処理することにより、管理コスト削減につながるものと感じたところである。

この施設も、広い敷地があり、配置されている処理施設、建物、貯蔵タンク等、全てのものに余裕があり、北海道という地域の違いを感じさせられた会派視察であった。

沼田市議会議員 星野稔 様

平成 30 年度新政同志会行政調査報告

平成 31 年 3 月 27 日

報告者 沼田市議会新政同志会 市議会議員 高山敏也

調査議員団 大竹政雄 野村洋一 高山敏也 茂木清七

実施日 平成 30 年 11 月 7 日～9 日

調査先

- (1) 11 月 7 日 北海道函館市末広町 函館地域交流まちづくりセンター
- (2) 11 月 8 日 北海道勇払郡厚真町 北海道東部胆振地震被災地
- (3) 11 月 8 日 北海道千歳市北信濃 千歳市防災学習交流センター
- (4) 11 月 9 日 北海道北広島市富ヶ岡 北広島下水処理センター

(1) 函館市函館地域交流まちづくりセンター

同センターが設置されている建物は、大正 12 年に鉄筋コンクリート 3 階建の洋風建築（復興式といわれる）として建てられ、昭和 5 年に 5 階建てとされました。その時設置されたエレベーターは、手動式の東北以北最古のエレベーターで現在も稼働しています。当時の外観が保存されている建物とともに観光の対象となっています。その後減築や耐震補強などを経て、平成 19 年 4 月に地域交流まちづくりセンターとして再生されました。

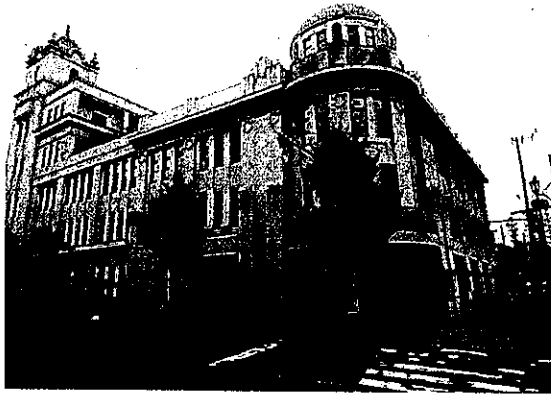
センター 1 階は、情報発信フロアとされ、市や各団体の活動情報などを伝えるパンフレットなどが置かれています。また移住相談窓口や喫茶コーナー、福祉の店「どんぐり」（障害者の皆さんが手作りされた小物やパンの販売店）などが常設されています。展示コーナーでは、7～10 日間の期間を定め、市民や団体による写真や作品の展示がなされています。水曜日には「水曜マルシェ」として、登録した市民が野菜や手作りの小物を販売（出展料は無料）します。視察当日が水曜日であったため、フロアはこのマルシェ（当日の出店は 18 店）で賑わっていました。

2 階は市民交流施設、3 階は市民活動支援施設として、100 席入る最も大きい多目的ホール（使用料 1 日 10,000 円）から 20 席までの会議室や研修室（使用料時間当 300～500 円）が設置され、印刷機・コピー機、月単位の貸しロッカーなどを設置、好評のうちに使用されています。また各階にはその月に予定されているイベントや行事などを各主催者が作成したパンフレットをカレンダー状に分かりやすく掲示し、情報発信に努めていました。また、予約などは定期的使用者などには柔軟に対応しているとのことでした。

所感

施設を案内して頂いた指定管理者のセンター長さんのお話の随所に自信と笑顔が溢れており、水曜マルシェや「どんぐり」に従事されている方々の表情も大変明るく感じました。これらの自信や活気は何処から生まれてくるのだろうか、不思議に感じました。建物自体の歴史性などの魅力もさることながら、所長さんは、集客力があることによって行政が運営について寛容であり、利用者の利益を第一に考えたかなり自由な運営管理が出来ている

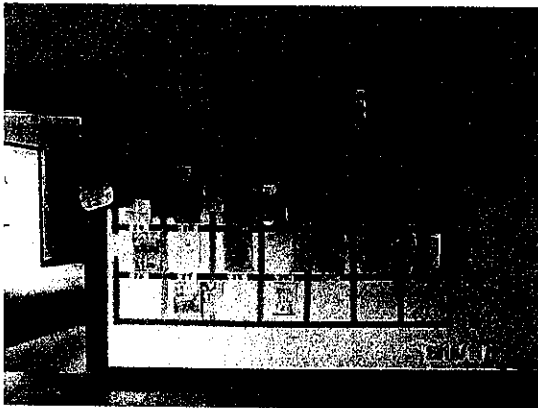
こと。と述べられていました。各種パンフレットをカレンダーとして掲示する、市民展示コーナーや月単位の貸しロッカー、水曜マルシェ、柔軟な予約制度、安価な使用料など様々な工夫が利用増や集客に結びつき、その実績がさらに好循環を生み出すものと感じました。行政の管理者の運営に対する寛容と、管理者の熱意と創意工夫が一体となり、本まちづくりセンターの活況を創っているとの所感を頂きました。



センター前景



センター1階フロアー



行事掲示板



どんぐり

(2) 厚真町北海道東部胆振地震被災地

北海道東部胆振地震 概要 (2018年10月5日消防庁集計より)

地震発生時刻 平成30年09月06日03時07分

発生場所(震源位置) 胆振地方中東部

北緯42.7度、東経142.0度、深さ37km(暫定値)

規模(マグニチュード) 6.7(暫定値)

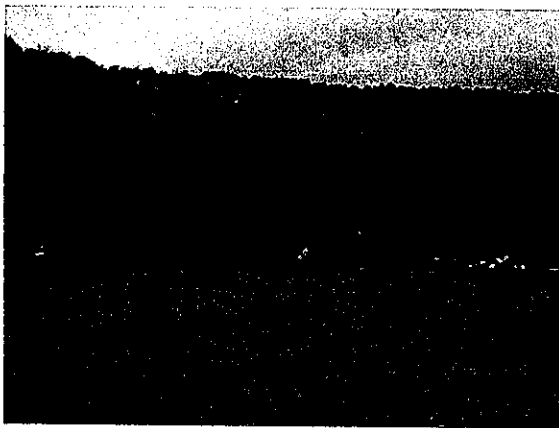
被害状況 死者41人 負傷者691人(重傷17人、軽傷674人)

住家の全壊394棟、半壊1016棟、一部破損7555棟

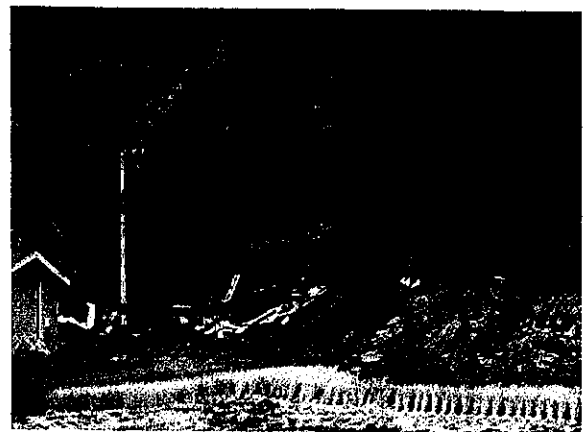
震源に近い勇払郡厚真町では震度7の強震に襲われ、土砂崩れに巻き込まれた36人が

亡くなりました。特に吉野地区では多くの住宅が巻き込まれ、吉野地区の住民 34 人のうち 19 人が亡くなりました。この吉野地区を視察しました。震災より 2 ヶ月を経過していましたが、被災状況はまだ生々しく土砂に埋もれた住宅などが残されていました。

厚真町役場を中心とした街中の道沿いでは、全壊・半倒壊、傾いた住宅、屋根をブルーシートで覆った住宅、また危険の赤紙が貼られた家屋など散見されました。市街地から車で 5~10 分ほど走ると小高い山々 (50~70M 程度の傾斜も緩やかな里山) が見えて来ます。驚いたことに山々の様子が異常でした。山に雪がある訳でもないのに地肌が白くなっているのです。山の表土が土砂崩れによって流され、地肌が露出しているのです。この当たりの山の地表は火山灰や軽石層が厚く、そこに多量の雨が降り地盤が緩んでいるところを強震が襲い、土砂崩れが発生したとのことです。被害は土砂崩れのあった山裾の住宅地に集中していました。



厚真町山崩れ現場



被災住宅

(3) 千歳市防災学習交流センター「そなえーる」

千歳市の三方には、陸上自衛隊東千歳駐屯地、北千歳駐屯地、航空自衛隊千歳基地が在り、防衛施設周辺地域の発展に貢献するための国の補助制度「まちづくり構想策定支援事業」の制度を利用し、防衛施設と共存した災害に強い安全なまちづくりを進めることを目的に、この防災学習交流センターが設置されました。総事業費 21 億円の内、75%を国庫補助に依っているそうです。

総面積 8.4ha という広大な土地を A・B・C という 3 つのゾーンに分けています。

Aゾーン (4.3 ha) では、3 階建延べ面積 2,300 m² の防災学習交流センターを中心に、防災訓練広場、ロープ訓練棟、防災備蓄倉庫、ヘリポート、駐車場などを設置しています。センター「そなえーる」には災害を「学ぶ」「体験する」「備える」をテーマに起震装置、煙避難装置、予防実験装置、避難器具などがそなえられており、スタッフが丁寧な説明をしてくださり体験もできます。

Bゾーン (1.1ha) は、「学びの広場」として、消火体験や救出体験を学ぶ広場となっています。

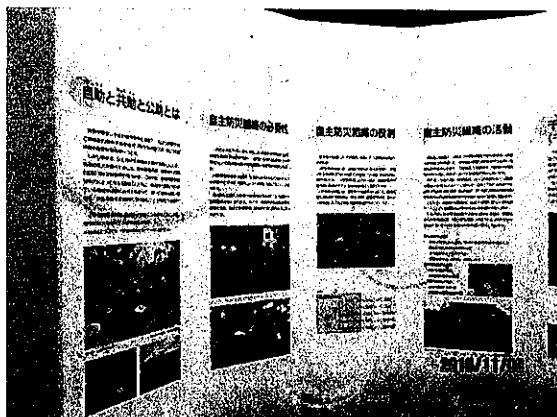
Cゾーン (3ha) は、「防災の森」として、野営生活訓練広場、多目的広場、河川災害訓

練広場、サバイバル訓練広場などが設置されています。

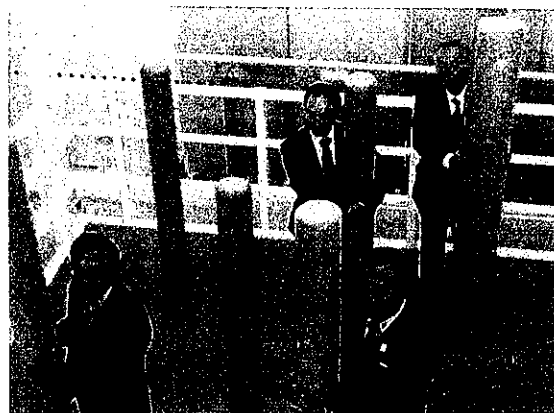
「そなえーる」では、防災意識を高めるために、市の総合防災訓練、町内会や自主防災組織などによる防災訓練や講座、イベントなどを開催し、利用者数は 22 年開設から年平均 45,000 人ほどの利用者を数えています。

所感 厚真町では今回の災害に襲われるまで山崩れなど無かったそうです。人的被害のほとんどがこの土砂崩れによるものです。地震といえば建物の倒壊や火災、津波による被害が想定されますが、今回の被害は多量の雨と地震が重なって起きた新たな災害パターンとも言えます。また、平成 30 年 7 月に広島、岡山、愛媛などを中心に甚大な被害をもたらした西日本の豪雨などにもみられるように、日本の気候は地球温暖化などを原因とし豪雨や暴風による災害を多発させています。自然災害の規模やパターンが変わってきていると言えます。

沼田市は比較的自然災害の少ない地域と言われていますが、災害状況や原因の変化、また直下型や南海トラフ等の大地震の危険など、わが市に、そして日本の各地に大きな災害が発生する可能性が大きくなっている昨今、行政、議会、そして市民が、これからの防災、減災に向けて真剣かつ早急に取り組まなければならないとの認識を新たにしました。



展示パネル



起震装置で体験する議員

(4) 北広島市 下水処理センター

北広島市は、人口 58,000 人程、130 年ほど前に広島県より集団移住したことから始まったとのこと。北広島の地名の由来が理解できます。

視察先の下水処理センターは、昭和 47 年に供用開始され下水処理を担って来ました。一方、同市では資源ごみを除いた一般家庭ごみ・生ごみは、最終処分場で埋立処分をされていたところ、処分場が一杯になることから、バイオマスを利用して処理することとし、下水汚泥、生ごみ、し尿・浄化槽汚泥を集約混合処理する計画を立て、下水処理センター内にバイオマス混合調整棟を新設し、平成 25 年度より共用開始されました。平成 29 年には、生ごみ 1,790 t、し尿・浄化槽汚泥 11,454 t の処理をされました。本施設設置には総額で約 23 億円を要しており、その約 3 分の 1 は国からの補助金に依っているとこのことで

す。

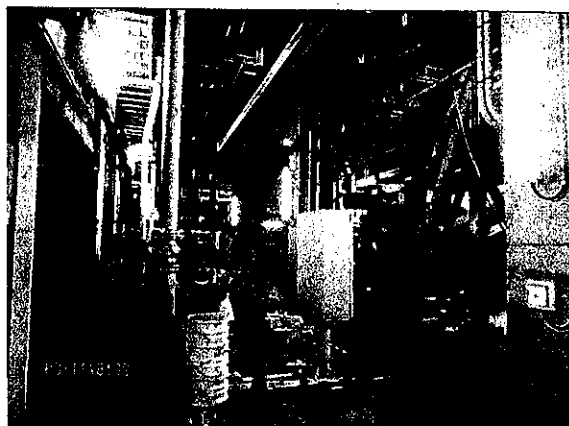
処理工程の概要は、下水汚泥、生ごみ（破碎後にビニールなど異物を除去した状態）、し尿・浄化槽汚泥をバイオ混合槽で混合し、消化槽で 28 日間ほど温度を加えメタン発酵、メタンガス（消化ガス）を発生させる（バイオガス化処理）、残った汚泥は乾燥させ肥料として再利用します。またこの消化ガスを消化槽の加温、汚泥の乾燥の燃料として利用しています。

それらバイオ混合処理の結果、重油燃料 107.1kℓの節約、3 処理施設を統合することによる建設コスト約 10 億円、維持管理費年約 1 億円の削減となっているとのことです。

所感 家庭生ごみ、し尿・浄化槽汚泥、下水汚泥と一緒にバイオガス化処理する本施設は全国初のものとのことです。バイオの力を利用した環境に優しい循環型のエネルギー政策、また最先端の技術導入などの新進気鋭の努力に敬意を表するとともに、生ごみの細かい分別に協力する市民、また啓発活動に労をいとまない職員（ごみステーションに立ちごみ出しの指導を行うこともあるとのこと。）の姿が想像されました。先進の施策・技術を大いに勉強し、市政へ取入れていくことの重要性和、更にそれを支えていく為に市民職員が地道に協力していく、正にマンパワーも極めて重要なものであるとの所感を頂きました。



センター前景



センター内部



消化槽



堆肥

平成 30 年度新政同志会行政調査（所感）

茂木清七

函館市地域交流まちづくりセンターについて

この施設は、指定管理制度で運営されており 5 年間の契約だそうです。5 年間で市からの委託料は、217, 015 千円だそうです。リーススペース、会議室、研修室、コピー使用料、等の収入を入れると 5 年間の総額が 254, 850 千円で運営されているとの事でした。

また、この建物は非常に歴史的建造物で、大正 12 年に、丸井今井呉服店函館支店として建設された。その後、昭和 44 年に市が土地建物を購入し、使用している。この施設は、定住者誘致推進事業として移住者サポートデスクを設置して 120 組 222 人の移住者の実績が有ります。

この施設の利用者登録は、300 団体くらいあるそうです。空きスペースがないよう工夫して賃料収入を得ているようです。指定管理とはいえ、利益を出さなければならぬと言っていました。

沼田市の指定管理業者も皆こう言う思いでやっていただくと沼田市の歳出が抑えられると感じました。

千歳市防災学習交流施設「そなえーる」について

千歳市は、三方を自衛隊の駐屯地で囲まれており、電車を利用すれば札幌市まで、約 30 分で行ける非常に立地の良い場所でもありました。

防災学習交流施設は、総面積が約 8.4ha で、A.B.C の 3 つのゾーンからなっており、A ゾーンでは地震の模擬体験、避難器具、防災備蓄庫などで、この場所では実際に北海道地震があった時に避難場所にもなったそうです。その他のゾーンでは、消火体験、救出体験等自助・共助・を学ぶ場、「野営生活訓練広場」などの施設がありました。年間利用者は、40000 人前後で延べ 30 万人の利用があったそうです。日頃から訓練する事で、非常に備える事が大事であると教えられました。

沼田市でも、毎年防災訓練を実施していますが、そのような事が実際には役に立つことであると感じました。

北広島市

北広島市下水処理センターにおけるバイオマスの利活用について

生ゴミとし尿を混合させ最後に堆肥化するというセンターですが、先ず、生ゴミを粉碎分別機にかけるのですが、市民への周知が大変だったと伺いました、生ゴミでも、卵の殻・貝殻・は破碎分別機を損傷させる恐れがあるそうです。また、トウモロコシの皮・タケノコの皮等は分解がしにくく集荷タンクにたまってしまう恐れがあるそうです。普段、生ゴミで出している物が出せないと言う事で、市民に理解していただくまでにはかなりの時間がかかったそうです。

生ゴミとし尿を混合させ、発酵する段階で発生するメタンガスで発電し、工場のモーターを回しているそうです。最後に乾燥させ堆肥化して袋詰めし、市民に9キロ入りを100円で販売しているそうです。バラの堆肥は農家にタダで配布しているそうです。袋入りは市民の方が家庭菜園などに利用し、バラ堆肥は農家で組合を作りそこに配布しているそうです。その堆肥で出来た作物はスーパーと契約し有利販売しているそうです。

この様な取り組みから、自然循環型農業の確立が成り立っているのだと感心しました。しかし、今後の課題も多い様で生ゴミが足らずフル稼働までにはいつてないそうです。建設費も25億円で補助を引いても市の負担が10億円あったそうです。以上のことを考えると、かなりコストがかかり大変な施設だと感じた。発想的には、素晴らしいと思いますが、まだまだこの様施設は早いのかなと感じました。

以上 新政同志会行政調査の所感です。